

2019年度活動報告



シンポジウム「過去の現在の未来2」関連展示 会場風景

撮影：Tomas Svab

國府理（1970～2014，京都市立芸術大学 美術研究科 彫刻専攻修了）は、自作した空想の乗り物やクルマを素材に用いた立体作品などを通して、自然とテクノロジー、生態系とエネルギーの循環といった問題を提起してきた美術作家である。福島第一原発事故への批評的応答として発表した《水中エンジン》（2012）は、自作した水槽の中に軽トラックのエンジンを沈め、水中で稼働させる作品である。部品の劣化や漏電、浸水などのトラブルに見舞われた國府は、展示期間中、メンテナンスを施しながら稼働を試み続けた。

國府の創作上においても、「震災後のアート」という位相においても重要な《水中エンジン》だが、発表の2年後に國府が急逝し、使用されたエンジンも廃棄されていたため、展示はほぼ不可能となっていた。だが、キュレーターの遠藤水城氏の企画により、2017年に再制作が行われた（現存するのは「水槽」のみであるため、今回の再制作では「エンジン」部分を対象とし、オリジナルと同じ型番の中古エンジンを使用した）。國府は設計図や稼働マニュアルを残していなかったため、記録写真や映像の調査、関係者へのインタビューなどを参照し、試行錯誤の連続だった。実際の作業は、生前の國府と関わりの深いアーティスト、白石晃一氏が担当した。

再制作作業は、エンジンの型番の調査などの準備期間を経て、2016年12月～2017年4月に1台目の再制作を、6月～7月に2台目の再制作を、京都造形芸術大学のULTRA FACTORYで行った。再制作1台目は、遠藤氏が企画したグループ展「裏声で歌へ」（小山市立車屋美術館、2017年）に出品された後、オリジナルが発表された京都のアートスペース虹での「國府理 水中エンジン redux」展（2017年）の前期で展示された。再制作2台目は、同展の後期にて展示した。

筆者は、この再制作プロジェクトにアーカイブ・記録担当として参加し、2017年11月に兵庫県立美術館にて開催したシンポジウム「過去の現在の未来2 キュレーションとコンサベーション その原理と倫理」の関連展示において、再制作のドキュメントや関連資料（國府による文章、ドローイングの複製、稼働の記録映像など）を展示した。資料展という

性格上、オリジナルの水槽と再制作のエンジンを分けて展示したが、真正面から見ると、水を満たした水槽の中にエンジンが浸かっているかのように見える視覚のトリックを仕掛けた。シンポジウムでは、再制作プロジェクトメンバーのほか、保存修復の専門家、美術館学芸員、研究者がレクチャーとディスカッションを行い、現代美術の保存修復や再制作の抱える課題、さらにその肯定的な意義や本質的な問題提起についての議論が交わされた。

この再制作プロジェクトの意義は、極めて多岐に渡る。1) 作家／設計図／モノの不在といった何重もの困難を抱えた状況下での再制作であること。2) 資料やインタビューの収集によるアーカイブの構築。3) 安全性を最優先に考慮した再制作 2 台とオリジナルとの「差異」の比較検討から、オリジナルの本質が逆照射されること。4) 動態的な作品における「同一性」の問題（物理的同一性／コンセプトのどちらのレベルに重きを置くのか）、「再制作」と言いうる根拠や倫理性、パーツを交換しながら新陳代謝的に生き延びる作品の「保存」のあり方など、「再制作」「保存修復」をめぐる広範な問いの喚起。

現代美術、特にメディア・アート作品や、非永続的な素材を使用した作品、一過性のインスタレーションやパフォーマンス作品をどう保存すべき／できないのかは、国内外の美術館における火急の課題である。本プロジェクトでは、再制作の記録、関連トークやシンポジウムの採録、再制作プロジェクトメンバーによる論考などをまとめた書籍の出版に向けて準備を進めている。

高嶋 慈（芸術資源研究センター非常勤研究員）